

総合グローバル学部 2019年度 第1回FD 5月14日 1530-1700 21名参加
司会：FD委員 記録：FD委員

「100分授業の導入1か月半を終えて」

冒頭、学部長より、日本語のできない外国人教員の将来的な採用について問題提起。

- ・ 今後、採用された場合にどうするのか。
- ・ 現時点では確たる仕組みはない。
- ・ 他大学の例
 - 学部内での分担の在り方。(日本語の必要な委員会免除、授業コマ数字を変える、雇用形態を分ける、教員の善意、無策の大学も。国際教養では学部長は日本語話者、学科長を英語話者と棲み分け。)

教員からの意見

- ・ 大学側の体制はどうなるのか？
- ・ 領域を超えたカリキュラム変更が必要になるかもしれない。
- ・ 基礎ゼミや演習など、どうするのか？

15時48分より、100分授業に関する以下の3つの質問を軸に、FD4名から冒頭発言があった。

「増えた10分をどのように生かしているか？」

「生かせていない場合はその理由は何か？」

「学生の反応はどうか？」

- ・ 脱線話を増やしてしまった。
- ・ もう少し教員側に自覚が必要。
- ・ 本質的な違いはない。
- ・ リアクションペーパーを、最初と最後に5分ずつ増やすことに利用。
- ・ 当てる回数が増えた。
- ・ 100分では学生も教員も肉体的な疲れがあるのではないか。特に5限目。

それを踏まえて、参加教員全員で意見交換を行った。主な意見を以下に列挙する。

- ・ 演習が100分になったのは、余裕ができてありがたい。
- ・ 講義では、内容が時間内に収まるようになった。
- ・ 短時間の英語の動画を見せて内容解説などに利用。
- ・ 15回用の授業内容を14回に割り振らなければならないのが困った。
- ・ 1限のTA確保がより困難になった。

- ・ 6限の終了時間が遅くなった。
- ・ 学生はそれほど困っていないのではないか。
- ・ 昼休みが短くなったので、面談が行いにくくなった。
- ・ 90×15(1350分)が100×14(1400分)に増えている。
- ・ 以前は15回目を課題としていたが、13回講義に課題を1回出すのでも良いか？
- ・ 時間割設定の自由度を高めることができないか？
- ・ 1年生にとって100分授業は長いのではないか？
- ・ 100分の英語の授業では、学生が付いてこれられない場合がある。
- ・ 50分、60分経った時点で5分ほど休憩を入れることもできる。
- ・ 最後の10分を質問タイムにしている。
- ・ 質問がない学生が、早めに教室から出て廊下で騒音を出し、他の授業の妨げにならないように注意が必要。
- ・ 日本の学生は全体の前で質問をしない傾向があるが、個別に前に出てきて質問できる時間を作れば発言を促せる。
- ・ 質問の仕方を評価に反映させる方法もある。
- ・ スマートフォンで質問を集めることも出来るが、WIFI環境が心許ない。
- ・ スマートフォンを使わせると、学生がそのままSNSなどに誘引される。注意を引き戻す工夫が必要。
- ・ 日本語コースの学生に英語の授業を取ることを義務付けるべきか。
- ・ シラバスにどの程度の英語力が必要か示す方法もある。(英語力版のナンバリング)
- ・ 基礎演習を英語でやる、あるいは、English Academic Writing 的な授業をほかの部局にクロスリストしてもらうのはどうか。

以上

総合グローバル学部 2019年度 第2回FD研究会議事録

7月9日(火) 15:30-17:00

司会:FD委員 記録:FD委員

参加者:19名(以下、敬称略)

第2回FD委員会テーマ「必修科目の再検討」

1. 全体で、FGS設立当初の必修科目選定の背景、各科目の趣旨について共有(15:30-16:00)
2. 各必修科目に分かれ、グループ・ワーク(16:00-16:40)
3. 全体に戻り、グループ・ワークで出た課題の共有(16:40-17:00)

冒頭、FD委員より、本会の趣旨として、学部創設時メンバーと新任メンバーの間に、必修科目に関して情報や理解に差があるので議論の場を作ることを目的としたいと説明があった。また、特に以下の3つの論点を挙げ、グループで話し合う事項が共有された。

- 1) シラバスの確認と検討
- 2) 学生の履修、成績状況(当日配布資料参照)
→必修科目による授業の難しさにバラツキがある(GS入門はFになる学生が少ない)。
- 3) 時間割上の配置時期など課題の抽出
→GS基礎演習を春に変更するなど。

1. FGS設立当初の必修科目選定の背景

急遽欠席となった学部長に代わり、Tより、下記のとおり、必修科目選定の背景と各科目の趣旨について説明があった。

- ・FGSは多様な専門性を持つ教員の集まり→そのため、入り口は学部にどのような学問にあるのかを学生に見せることを目的に、輪講形式の必修科目を立案した。
- ・基礎演習を基本的に後ろにした(秋学期)のは、春学期に全体像を見せて、学生自身がそれぞれの関心を持てるようになってから、基礎演習でその内容を深めることを目的とした。ただし、不具合があれば検討事項とすることが当初より共有されていた。
- ・輪講形式とするかどうかは、地域研究領域と国際関係論領域の間で当初から議論があった。まず、国際関係論は教科書のように教えるべき内容があるので、一人が担当するのがいいという意見があった。他方で、地域研究はそれぞれの地域の人が話す必要があるので輪講となっ

た。ただし、東アジアや南米などの専門家は地域研究に専門家がいないので、全体を話すメンバーが必要となった。

・ただし、次のような積み残しがあった。本学の国際関係論は、国際政治学に合わせて、国際協力と市民社会も視野に入れた広い枠組みであり、本来は入門として国際協力と市民社会を含める必要があったが、当時、経済学や社会学の人員が不足していたため、国際協力と市民社会に関して独立して科目をたてることができなかった。

・Sより補足：国際関係では、市民社会や国際協力が欠落しているので、グローバル・スタディーズ入門のシラバスを作成する際に、市民社会と国際協力の担当者をそこに含めるよう配慮した。

・T：グローバル・スタディーズ入門の問題点として、教員間に、グローバル・スタディーズに関する共通理解がなく、そのため学生もまたグローバル・スタディーズとは何かをわからないまましていると意見が出た。また国際協力等が骨幹に組み込めないという問題点も指摘された。

→Tよりリプライ：グローバル・スタディーズとは何かを全体で説明することは不可能なので、イメージとしては、国際関係で「全体」、地域で「ローカル」という視点をもっている。

→Tより、グローバル・スタディーズ入門の1～2回目授業にグローバル・スタディーズとは何かを説明する必要性があると指摘された。

→当初は、コーディネーターのT先生が英語圏におけるグローバル・スタディーズの歴史に関する担当を検討されたが立ち消えに。

→コーディネーターのTより、FGSには多様なディシプリンと地域の専門家の集まりのため、GS入門の目的は教員がどういうものを扱っているのかを紹介することにあると回答。

2. 各必修科目に分かれ、グループ・ワーク（16:00-16:40）

担当科目にこだわらず関心によりグループを選択し、グループワークを実施した。

- A) グローバル・スタディーズ入門 (T)
- B) 地域研究入門 (M)
- C) 国際関係論入門 (S)
- D) グローバル・スタディーズ基礎演習 (T)

以下、A) グローバル・スタディーズ入門のみ詳細を明記する。

A) グローバル・スタディーズ入門のグループワーク (T、N、S、T、T)

・グローバル・スタディーズについて

T: グローバル・スタディーズを説明していないため、学生はグローバル・スタディーズとは何かをイメージができていない。各講義スケジュールの前に、研究史を話すような回を設けてはどうか? 武蔵野大学 (アメリカ研究) の S 先生がグローバル・スタディーズの研究史についてまとめているので参考になる。

S: 当初、地域研究と国際関係論の研究者間で、グローバル・スタディーズとは何か合意できていなかった。新たなコンセンサスが必要ではないか?

T: 研究史を軸としたグローバル・スタディーズの理解は必要。

T: T 先生がコーディネーターの時から変わってきている。ただし、第 1 回目は 4 月で新入生には大学生活に関する基礎的なことを伝える必要があり、担当回としては難しい。

・地域研究入門と GS 入門の重なり

T: アジア研究は個別の研究を話すことができているかもしれないが、中東・アフリカ研究では総論ができない。 이슈ごとに話すようにしているが散漫になっている感があり、また中東研究概説とも重なる。

T: GS 入門はディシプリン (～「学」でまとめる) 毎に回を設けるように変更しては? 例えば中東・アフリカ研究は「グローバル・スタディーズとジェンダー」に置き換えるなど。

・地域研究入門と内容が重なるので、GS 入門で地域研究は不要? → 「グローバル・スタディーズと地域研究」は、上智的な地域研究の変遷を紹介しているので必要 (?)。

・国際関係論は市民協力と半々にすべき? 市民社会は 6 年くらい同じ人が担当している。授業負担の問題もあり、配置人数を考える必要がある。

・GS 入門の評価について

地域研究は試験が課される。共通問題はコーディネーターの A 先生が担当で、選択含め 2 問。GS 入門はブックレポートと最終レポート。最終レポートの課題は「自分にとってはグローバル・スタディーズとは?」と決まっている。

ブックレポートの提出が遅れた学生に、今年課題図書に入っていないブックレポートを書いている学生が複数名いたが、先輩の内容を使いまわしている可能性もあると指摘があった。

- ・コーディネーターは誰にするのか？：ローテーションにするなり、全体の配分が必要？
- ・全体への提案：ジェンダー論など、ディシプリンでまとめて担当していく。中東・アフリカ研究と、アジア研究はディシプリンに切り替える。1年は基礎演習。2年の空白があるので、そこに必修科目を入れて、3年に繋げることもできるのでは？

3. 全体でグループワークで出た課題の共有（16:40-17:00）

A) グローバル・スタディーズ入門

Tより報告：

- ・グローバル・スタディーズとは何かを学ぶために、グローバル・スタディーズ研究史について学ぶ回を設ける。詳しくは、次回のFD委員会で検討する。
- ・グローバル・スタディーズの講義担当をディシプリンごとにするを提案したい。そのために、地域研究を抜いて、グローバル・スタディーズ研究史やジェンダー論とするのが一案。
- ・担当者について、全体をローテーションで回していく必要がある。市民社会は6年くらい同じ人が担当している。
- ・2年生の時に必修が何もないので、必修科目のいずれかを2年に回すことも検討したい。

B) 地域研究入門

Mより報告：

- ・現状の問題点に関して話し合った。まずメジャーとなる、アフリカ、中東、東南アジアは残すとして、専攻のマイナーとして入っていない東アジアや北米は地域研究から外すことを要検討。
- ・試験問題を各回で小テストにすることが提案された。
- ・SPSF科目の担当増を考慮し、各自の負担を減らすという視点から、必修3科目の担当も考え直す必要あり。

C) 国際関係論入門

Sより報告：

- ・剽窃について、基礎演習でもしっかりと話す必要がある。国際関係論で、写すことが勉強だと思っている学生がいたので、その間違った発想の転回を早い段階で教授する必要がある。

- ・大人数でのクラスコントロールの方法
- ・他の必修科目に関して成績評価が厳しくなることについて
- ・市民社会論が国際関係論に入らなかった印象があるが、入学時には国際協力を志す学生が多いことを踏まえ、2年生では、必修として開発系のニーズに提供する必要があるのでは？

D) グローバル・スタディーズ基礎演習 (T)

Tより報告：

- ・T先生から、基礎演習でPCの使い方を教えていると報告。
- ・英語で行う基礎演習の担当者がいてもいいのでは？
- ・2年生で必修がないので、科目の配置を検討する必要性が指摘された。例えば、初年時はアカデミック・リテラシーやライフスキルも含めて1年間続けるなど。
- ・履修者が減少傾向にある自主研究について考え直す必要性と、基礎演習とのつながりを検討する必要がある。

Mからの提案

1. 春：GS基礎、GS入門
2. 秋：国際関係論、地域研究入門

資料1

2019年10月15日

総合グローバル学部 FD 研修講演会報告書

1. セミナー名 グローバル・スタディーズとは何か？
2. 主 催 上智大学総合グローバル学部
3. 講 師 名 示村陽一氏
(武蔵野大学グローバル学部グローバル・コミュニケーション学科教授)
4. 日 時 2019年10月15日
午後3時30分～5時00分
5. 場 所 2-603
6. 出 席 者 20名
(出席者詳細は別紙)

7. 講演内容 (約400字)

本学総合グローバル学部 (FGS) が発足して6年目を迎えるなか、「グローバル・スタディーズとは何か」という基本的な「問い」に関する教員間の共同理解は深まっているとは言いがたい。そこでグローバル・スタディーズそのものを専門に掲げて研究されている講師を招き、お話をうかがった。参加者 (FGS 専任教員) はあらかじめ講師による「グローバル・スタディーズとは何か」(2017年) という論考を読んだうえで講演に臨んだ。講演では学問分野としてのグローバル・スタディーズ (GS) の歴史に触れたうえで、GS は globalization studies と言い換えることができるとし、それは学生個人の identity に変革を迫ること (= national identity からの脱却を目指すこと) であることが強調された。特に異文化理解の「障害」となる要因を学生に考えさせることによって、異文化適応能力を育成する点に意義があると語った。

以 上

2020年 1月 27日

第4回総合グローバル学部FD企画報告書

1. 研修名 自動音声認識ソフト UD トークの世界
2. 主催 上智大学総合グローバル学部
3. 講師名 青木秀仁氏 (Shamrock Records 株式会社代表取締役)
4. 日時 2020年1月21日(火) 15:30-17:00
5. 場所 6-603
6. 出席者 20名(学部外4名を含む)
(出席者詳細は別紙)

7. 講演内容(約400字)

現在、自動音声認識ソフトは聴覚障害者への情報保障支援だけでなく、多言語翻訳による国際対応、会議での議事録作成・文字起こしなどに幅広く利用されている。本学では、2019年度秋学期より、AIによる自動音声認識コミュニケーションアプリ「UD トーク」を法人契約している。

本研修では、本学でのUD トークの活用例を紹介しながら、授業方法や教育活動の改善について検討した。そしてUD トークの開発者である青木秀仁氏を講師として招聘し、UD トークを開発した背景と広くインクルージョンを推進するための考え方、自治体や教育機関などでの運用事例、授業の改善のための基本的な使い方から、講義録や議事録作成など、授業や業務利用のための実践的な使用方法を講演いただいた。研修会に参加した教員からは、特に留学生やさまざまな学習障害をもつ学生にとって、UD トークの文字起こし(翻訳も伴う)機能が学習支援に繋がるので、授業で積極的に使いたいという意見が多数あった。